静御前（頼　山陽）

工藤の　銅拍　秩父の　鼓
幕中　酒を　挙げて　汝の　舞を　観る

短歌　賤や　賤　賤の　苧環　くり返し
昔を　今に　なすよし　もがな

一尺の　布　猶を　縫うべし
況んや　此の　繰車　百尺の　縷をや

短歌　吉野山　峰の　白雪　ふみ分けて
入りにし　人の　跡ぞ　恋しき

回波　回さず　阿哥の　心
南山の　雪　終古に　深し

工藤銅拍秩父鼓　幕中擧酒觀汝舞
一尺之布猶可縫　況此繰車百尺縷
同波不回阿哥心　南山之雪終古深

解説　頼朝に追われた義経への思慕を表し、静の舞い姿を詠んだ詩。

語釈　※工藤＝工藤祐経のこと。※銅拍…日本伝統音楽の打楽器。※秩父＝畠山重忠のこと。※鼓＝皮を張って打ち鳴らす楽器。※幕中＝鶴岡八幡宮の境内に張り回らした幕の中。※挙酒＝酒を飲む。※苧環＝糸によった麻を、中を空虚にし、丸く巻きつけたもの。※一尺之布＝わずか一尺ほどの布でも、なお衣服の用に供することが出来る。※繰車＝糸ぐるま。※況＝いわんや。※縷＝糸すじ。糸。※回波＝繰り返し打ち寄せてくる波。※阿哥＝義経の兄、つまり頼朝。※南山＝吉野山。

通釈　鶴岡八幡宮の境内。頼朝の着座を待ち、工藤祐経の銅拍、畠山重忠の鼓が置かれている。これから酒を傾けつつ、静の舞を観賞する。静は舞いを促されて歌う。義経の所在が知れぬのに、満座の中で歌や舞は出来ませぬと訴える静。しかし頼朝は、再三の厳しい下命。意を決して舞い始めたその歌は、一尺の布でさえ、二つに裁断して着物に縫うことも出来る。兄弟の心を一にして打開の道を図るならば、自ずから道は開けるのに、それをどうして憎み合わねばならぬのかと歌った。弟が一尺の布しか持っていないとすれば、貴方は糸車にかけた百尺の糸を持っておられる。功績を立てた弟を、仕打しなくとも良いのではないか。頼朝様の気持ちが昔に戻らぬからといって、私は吉野の奥の深く積って消えない雪のように、義経様への深い恋慕の情もまた消えません。